

月刊 都響
September 2023



気を付けてね！ ホールでの過ごし方

- 携帯電話や音が鳴るモノは電源を切りましょう。
- 演奏中はお話ししないで静かに聴きましょう！
周りの人も演奏を楽しみに来ています。
- 録音・録画、写真撮影は禁止です。

2023
9/3

Subscription Concert

第980回定期演奏会 A シリーズ

会場：東京文化会館

指揮／サッシャ・ゲッツェル

ヴァイオリン／ネマニャ・ラドゥロヴィチ

♪ リヤードフ：ポロネーズ 八長調 op.49
—プーシキンの思い出に— (約7分)

♪ チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.35 (約37分)

♪ チャイコフスキー：交響曲第5番 木短調 op.64 (約48分)

 東京都交響楽団

PROGRAM NOTES

今日のコンサートは、チャイコフスキーとリャードフという二人のロシアの作曲家を取り上げます。ロシアでは長らく宗教合唱音楽が盛んでしたが、19世紀の後半からは、音楽家たちが“ロシアらしさ”を意識した、力強く雄大なオーケストラ作品を盛んに作るようになりました。

リャードフ：ポロネーズ ハ長調 op.49－プーシキンの思い出に－

作曲者のアナトリー・リャードフ（1855～1914）は、少し上の世代にあたるリムスキー＝コルサコフやチャイコフスキーといったロシアの先輩作曲家たちに憧れを抱き、また指揮者や音楽院の先生として、ロシアの作品を広めることにも力を注ぎました。タイトルにあるプーシキンとは、ロシアの偉大な詩人・作家の名です。プーシキンの詩や戯曲や小説は、数々のロシア人作曲家によってオペラ化されています。リャードフはそんなプーシキンの生誕100年を記念して、1899年にこのポロネーズを作りました。「ポロネーズ」とは、もともとはお隣の国ポーランドの民族舞曲です。堂々と華やかな音楽は、リャードフがやはり尊敬していたショパンの音楽からもインスピレーションを得ているかもしれません。



リャードフ

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.35

ヴァイオリンのソリスト（独奏者）とオーケストラとが、会話をするように、ときに寄り添い、ときに競い合うようにしながら、ともに音楽を作り上げていくのが「ヴァイオリン協奏曲」です。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～1893）は、《白鳥の湖》などのバレエ音楽でも知られる作曲家ですが、このヴァイオリン協奏曲も彼の傑作の一つです。第1楽章には胸が熱くなるようなドラマティックなメロディーが登場し、第2楽章は独奏ヴァイオリンがもの悲しいメロディーを奏でます。続けて演奏される第3楽章はロシアの民族舞曲をベースとした快活なフィナーレとなります。

作曲されたのは1878年、チャイコフスキーが38歳になる頃で、作曲を教えていた若いヴァイオリニストに相談しながら完成させました。演奏するのはとても難しく、有名なヴァイオリニストからは「演奏不可能」と言われてしまいました。ようやく3年後に初演されましたが、その真新しい響きは聴衆を驚かせ、批評家からは「悪臭のする音楽」と厳しく批判されました。もちろん今では名曲として愛されていますが、新たな時代を切り開くものは、人々に受け入れられるまで時間を要するのです。



チャイコフスキー

個性的な演奏で人気のヴァイオリニスト、ネマニャ・ラドゥロヴィチとサツシャ・ゲッツェルによる「チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲」はCDやYouTube Musicでも聴くことができます！


チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 op.64

後半もチャイコフスキーの作品です。「交響曲」とは「響きが交わる」と書かれるように、さまざまな楽器が活躍し、色鮮やかで立体的に演奏されるオーケストラ曲のことで、チャイコフスキーは生涯に6つの交響曲を残していますが、本日演奏される5番目の交響曲は1888年に作られました。

第1楽章の冒頭はクラリネットが重々しいメロディーを奏でます。



これは「運命」を表すと言われているテーマで、この作品全体にわたって登場するので、しっかりと心に刻んでください（ただし登場するたびに演奏する楽器や強弱が異なり、さまざまな表情に変化します）。やがて歩みを進めるような主題が現れ、情熱的に展開していきませんが、楽章全体はどこか重い雰囲気包まれています。

第2楽章も暗く静かに始まりますが、すぐにホルン  が柔らかなメロディーを奏でます。クラリネットがそれに寄り添い、オーボエは光射すようなモチーフを奏で、音楽は広がりを増していきます。続く第3楽章は、当時の交響曲としては珍しく優雅なワルツ（3拍子の舞曲）となります。バレエ音楽の大家でもあるチャイコフスキーらしい展開です。第4楽章は、第1楽章冒頭の「運命」のテーマが、優しく明るい表情で登場します。力強く雄大な広がりを見せたのち、運命に勝利するかのようにテーマが輝かしく鳴り響きます。クライマックスをへて、行進曲のような力強い音楽で締めくくられます。

文/飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）

指揮 サツシャ・ゲッツェル Sascha GOETZEL, Conductor



©Özge Balkan

ウィーン生まれ。ウィーン国立歌劇場管弦楽団のヴァイオリン奏者として活躍中にズービン・メータ、小澤征爾らの薫陶を受けた。小澤征爾に指揮者のフェロウシップとしてタンゲルウッド音楽祭に招かれ参加、その後指揮をヨルマ・パヌラに師事。

現在、フランス国立ロワール管弦楽団音楽監督、ソフィア・フィルハーモニー管弦楽団（ブルガリア）首席客演指揮者、カナダ・ナショナル・ユース管弦楽団音楽監督を務めている。ウィーン国立歌劇場では『フィガロの結婚』『こうもり』など6演目を指揮。日本では2022年4月の新国立劇場『ばらの騎士』で成功を収めた。都響とは今回が初共演。

ヴァイオリン ネマニャ・ラドゥロヴィチ Nemanja Radulović, Violin

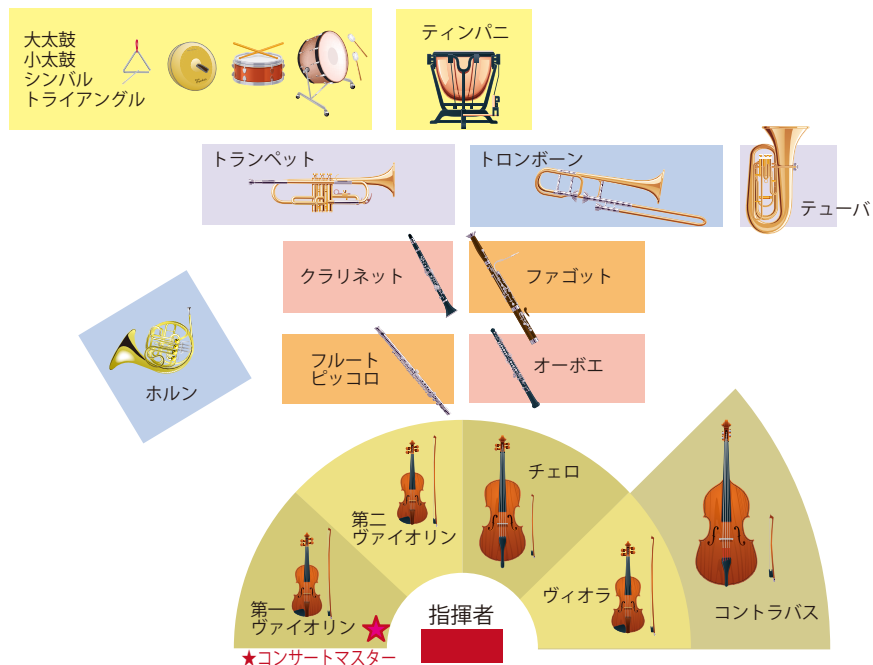


©Hiromichi Nozawa

セルビア生まれ。ザールラント音楽演劇大学（ドイツ）、ベオグラード芸術大学（セルビア）で学んだ後、14歳で渡仏。15歳でパリ国立高等音楽院に入学してパトリス・フォンタナローサに師事。5つの国際コンクールで第1位を獲得するなど受賞も多く、ニシュ芸術大学（セルビア）から名誉博士号を贈られている。世界の一流オーケストラと共演するほか、カーネギーホールなど世界中で公演を行っている。自身がリーダーを務めるアンサンブル『悪魔のトリル』および『ドゥーブル・サンス』との活動も活発。『チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲』『パガニーニ・ファンタジー』などCDも多数リリースしている。

オーケストラ配置図（9月3日 第980回定期演奏会Aシリーズ）

演奏する曲によって使わない楽器もあります。
どの曲にどの楽器が使われているかにも注目してみてくださいね。



※楽器の配置は一例です。当日のステージで確認してください。

TMSO 東京都交響楽団



東京オリンピックの記念事業として
1965年に東京都が設立しました。

都響（ときょう）という愛称で親しま
れています。

上野の東京文化会館を本拠地として、サントリーホールや東京芸術
劇場などで定期的にオーケストラの演奏会を開催しています。その他、
交響組曲『ドラゴンクエスト』（全シリーズ）や『Fate/Grand Order』など
ゲーム音楽の演奏や、都内の小中学生を対象に開催している音楽鑑賞教室、
病院や福祉施設への出張演奏など多彩な活動に取り組んでいます。

2021年7月に開催された東京2020オリンピック競技大会開会式では、
「オリンピック賛歌」の演奏（大野和士指揮／録音）を務めました。